

# 共創先導プロジェクト(共創促進研究) コミュニケーション共生科学の創成

## 意見書(令和 6 年度)

アドバイザーボード委員

柏岡 秀紀

### (1) プロジェクトの特徴的な取組・特筆すべき成果

当該プロジェクトは、すべての特性を持つ人たちが同等に参加できる「コミュニケーション共生」を実現する社会を目指している。そのために、4 つのコミュニケーション課題として、「視覚」「非視覚」「脳機能」「個人の特性」に着目した研究班を構成するとともに、個別の研究班に対してではなくプロジェクト全体に対してプロジェクト協力者と言う立場で外部からの参画者を募り、各研究班個別での議論に加え、全体を意識しながら議論する場を定例会として実施し、個別課題に関する成果のとりまとめだけでなく、連携することによる課題解決に向けた活動を推進している。

令和 6 年度においては、ロードマップに計画されている「研究集会の開催」を定例会、中間報告会、全体会として実施しており、また「手話言語に関する書籍の出版」に関しても報告書・編著書 6 冊を刊行(一部予定)するなど、精力的に活動している。特に、現在はまだ刊行されていないが、『日本手話版日本手話で学びたい!』富田望・菊澤律子(編)における DVD の制作は高く評価できる。従来の文字による書籍としての出版だけでなく、「コミュニケーション共生」において大きな課題となる手話を映像として多くの読者と共有できるように出版することは意義深い。加えて、令和 4 年度に実施していた国立民族学博物館における特別展示「Homō loquēns 「しゃべるヒト」～ことばの不思議を科学する～」(2022 年 9 月 1 日から 11 月 23 日まで)の展示内容を強化しつつ、インターネット上での再現、新たな展開を目指した活動も継続している。また、研究データの公開に関しても、2023 年度外国人データの公開や 2024 年度手話談話データ、ASD コーパスについての公開準備を進めており、「コミュニケーション共生」を実現する新たな研究分野を構成する研究環境が着実に培われており評価に値する。

これらの取組は、地道な活動による着実な成果であり、一定数の研究成果が定常的に報告される状況と考えられる。これは、当該プロジェクトの目標達成に必要な研究者コミュニティが形成されつつあると評価できる。また、手話による書籍内容をすべて映像化し出版すること、上段の DVD 制作においては、研究者だけでなく、コミュニケーションに課題を有する様々な特性を持つ人々への社会的におおきなインパクトとなる。

### (2) プロジェクトの自己点検結果及び課題等

令和 6 年の活動は、(1)に示した成果だけでなく、新たな課題にも取り組んでいる。これまでに指摘していた本プロジェクトに関与した研究者だけでなく、社会への還元を進めるために、これまでのプロジェクトによる研究会や扱っているデータ等をブックレットとして刊行する取り組みを開始している。展示会等の開催時のインパクトとは異なり、様々な場面で活用でき、常に手に取って利用できる成果展開として、コミュニケーションに対して多様な特性を持つ人々の間に生じる課題を対象とする研究分野の存在を広く社会に知らしめることができると考える。目標としているブックレットの刊行にとどまらず、刊行されたブックレットの活用法なども課題と考える。

「コミュニケーション共生」という課題は、様々なコミュニケーションの基盤となるべき視点が必要であり、現状のメンバーだけで無く新たな領域への課題共有が必要である。日本リハビリテーション医学会との共同企画は、その観点からも高く評価されるべき活動である。今後、「コミュニケーション共生」の課題が、リハビリテーション医学会に定着して議論でき、成果が出るような取り組みが必要であり、課題と考える。